

ぶらたなす

NO.4

文月

(ふづき)

長井高等学校

図書委員会

図書館

2025.7.22

夏休み中の読書



図書館長より

早いもので、今年度が始まり、もう夏休みを迎える時期となってまいりました。みなさまはこの暑さにどう対応しながらお過ごしでしょうか。

夏休みは涼しい図書館へ行って、集中して課題も終わらせようと考えている人がたくさんいると思います。もし集中力が切れてしまったなら、周りにある本たちに目を向けてみるのはどうでしょうか。いつも見えていないような本がたくさんあって、勉強の合間に自分の興味を増やしていけるのではないかと思います。平日や休日になかなか本を読む時間がない、という人が多いと思うので、夏休みを利用して自分のお気に入りの一冊を見つけてみませんか。

(2-4 図書委員)

図書委員のおすすめの本

『ラブホールプレー』

小瀬木 麻美：著

ポプラ社

今回は、高校の青春時代の内容をおすすめします。バドミントンに打ち込む高校生たちの青春を描いた物語です。主人公の水嶋亮は中学でバドミントン部に入部し、持前の体力で県大会に出場するまでに成長します。しかし、指導者に恵まれず、個人で練習を重ねていました。そんな亮のもとに、名門・横浜湊高校バドミントン部の監督である海老原先生がスカウトに訪れ、迷いますが、進学します。そうして毎日、バドミントンに打ち込み、インターハイで先輩後輩で戦い、負けたことをバネに最後まで励んでいくことになります。この本を読むと心の励みになると思います。ぜひこの夏読んでみてください。(2-4 図書委員)

押忍！ 図書館長です。今回紹介するのは、太宰治（だざい・おさむ）の『女生徒』だ。恥を晒せば、何を隠そうこの私、国文学を専攻し、国語で飯を食っておきながら、今日まで読んだことがなかったのだが、来月に本校で開かれる学校図書館関係者の研修会で本作がテキストとして使用されることとなり、しびしび重い腰を上げたという次第。

まあでも、読むとやっぱり面白いね、太宰。今なおどハマリする「信者」が絶えないのも、むべなるかな。彼らは恐らく、誰にも分かって貰えない自分の内面を、太宰が必死に代弁してくれているように感じて、感謝と敬愛を捧げているのだろう。だが、賭けてもいい、彼が一生懸命なのは、彼自身についてだけだ。彼にとって、読者とは、「自分をどう見ているか分からない、不気味な他者」に過ぎない。

本来ならば、自分のことばで語るべきなのだ、自分の内面は、たとえどんなに拙くても。太宰の巧みな弁舌にうっかりうっとりしてしまった読者は、甘美なカタルシスに酔い痴れ、自分のことばを、つまり自分の内面を喪失したことに気付けないまま、彼の劣化コピーへと成り下がる。こうして、80年もの長きに亘り、彼は自らの眷属を増やしてきた。

この吸血鬼めいた魅力は、何も太宰の専売特許ではない。文学とはそもそもそういうものだ。「文学の意義は、虚構も含め、他者の人生を追体験できることだ」？ 笑止！ 読者から主体的に読まれてしまう程度の駄文が、文学を僭称するとは！ 真の文学とは、読者を侵略し、蹂躪し、恭順させて傲然と嗤う、形而上の暴君に他ならない！

でも、面白がりこそすれ、私が太宰に魅了されることは、これからもないかな。彼一流の麗句では——「もし現実がAだったら、私はBしただろうに」——、紅顔を煮え湯で爛れさせられた初老の男の傷は、到底癒せない。さしもの文学も、より下層の地獄でのたくる亡者には、その魔力が通じないのだ。